

発掘! さわめびと

夏は、野の花や野菜の花を写生。冬、水彩画に没頭する農村生活マイスター。



すだたみえさん 須田民恵さん

1943年茅野市生まれ。損害保険会社、保育園勤務を経て'75年、結婚を機に佐久穂町に。結婚後は農業(有機)一筋で、ご主人が建設会社経営のため、一人で農作業に従事。「毎年12月下旬まで出荷していると言っても誰も信じてくれない」。'95年、長野県農村生活マイスターに認定され、レンギョウでは農協の長野中央会長賞を2度受賞。地区の民生委員を4期務めた。水彩画の他に3つのコーラスグループに所属。ご主人と2人家族。

「私が絵を描くのは、野の花、野菜の花を見て感動した気持ちを描き残して誰かに伝えたい、そういう気持ちだよ。だから、私にとって絵は農業の延長、生活の延長なのよ」

夏

は農業で忙しいため、冬の間、精神的に絵筆を握るといふ須田民恵さん。この日も、県展(日本水彩会第六〇回長野県展)に出品するという四〇号の大作の仕上げに余念がなかった。

「その年の規格(号数など)に合っていれば、落とされることはないんだけど、落とされてもいいの。挑戦することがいいことだから。去年は会場が信濃美術館だったんだけど、そういうところに飾ってもらえるだけでもいいじゃない」(笑)。

と屈託なく笑う。出品作も含め、他の作品もほとんどが花の絵だ。

「私は野の花、野菜の花がテーマなの。農業をしているので、どこかに写生に行ったりとかできないから、描くのは日常見ている野の花だったり、野菜の花

イヌフグリとかみんなが踏んづけるような花だけど、かわいんだよね。オクラの花なんかもきれいで感動するし、ナスだって素敵な花。だから、私が絵を描くのは、そういう感動した気持ちを描き残して誰かに伝えたい、そういう気持ちだよ。だから、私にとって絵は農業の延長、生活の延長なのよ。それとあと描くのは孫ね」(笑)。

本格的に水彩を描き始めて十年。もともと絵はそれほど好きではなく、「色」に興味があったという。

「京都に行つて、染色の仕事とか、友禅の絵描きとかをやりたいくてね。でも、うちは兄妹が大勢いて、母が絶対に子どもを外へ出さないという主義で、ちょっと道に逸れたことは絶対やらせてくれなかったの」

水彩に出会ったのは、結婚して佐久穂に来てまもなく。「実家のある茅野にすばらしい絵を描く先生がいらして、その先生の教室が冬の間に、月にいっぺんだけあって、実家へ帰るといふ口実に三ヶ月通ったことがあるの。そのときの影響がすごくあるね」

そして十年前ボタニカルアートに出会い、五年間学んだ後、佐久創造館の水彩教室(佐久水彩会)に入った。

佐久水彩会の魅力は、講師の米津福祐先生だという。「国展の審査員もされるような先生なんだけど、直接絵の指導はせずに、もっぱら作品の講評ね。それが絵だけじゃなく、音楽とか詩とか短歌とか、すべてに通じる大学の講義みたいな面白い話だね。月に一回、先生の話聞くのが楽しみな」

集中的に描くのは冬だが、夏は夏で写生に忙しい。「花のおしまいの時期に取

つてきて描くんだけれど、一晩で描かないと萎れちゃうから、その日は早めに農作業を終えて、描き出すの」

たいいてい花は何度も描いているので、「見ないでもサッと描ける」というのが、それでも十二時くらいまで夢中で描く。

「水彩の好きなのところは透明感のあるところね。しかも油絵みたいにならぬ塗り直せないでしょう。その分、

何枚も描かなくちゃいけないだけ」(笑)。でも、絵をやっていると自然と仲間が増えるのよね。全然知らない人が、私の絵を見たとか言って、「お孫ちゃんの絵かわいかったよ」って、そうやって仲間が増えていくって、すごくいいことだと思うの」

絵を描くことが、生きる糧にもなっているという。「農業は一時期の半分くらいに減らしたんだけど、相変わらず忙しいわね。農業って、これでもいいってことがないからね。でも、忙しく毎日を通り越せるのも、絵をやったりしているからだと思う。苦しみだけだったら、人は絶対生きていけないと思う」

絵についてはほとんど何も言わないというご主人も、「孫を描いた絵を見たときは、『他はどうでもいいけど、これだけはいいな』って」(笑)。



40号の大作に向かう民恵さん。「描きあげたときの達成感はあるけど、描いてるときのストレスの方が多いわね。額が高いのも頭が痛い」(笑)